

「北風をたずねていった男の子」

「粉は、ここにはないよ。」と、北風は答えました。「でも、そんなにこまっているなら、布を一まいあげるとしよう。ただ、布にむかって、『布よ、ひろがれ、ありったけのごちそうをだせ!』と言ええすれば、**思うとおりのものが、なんでもでてくるという布だよ。**」

それをもらって、男の子は、とてもよろこびましたが、道が、とても速いので、その日のうちには、家にかえれませんでした。そこで、途中にある宿屋にとまりました。夕ごはんになって、みんなが食卓についたとき、男の子は、へやのすみにあつたテーブルの上に、布をおいて、こう言いました。

「布よ、ひろがれ、ありったけのごちそうをだせ!」

そう言うか言わないうちに、布は、もう言われたとおりのことをしていました。みていた人たちは、なかなかすばらしいものだ、と思いました。が、なかでも、宿屋のおかみさんは、いちばん感心してしまいました。

おかみさんは、この布をテーブルにひろげて、言いつけさえすれば、煮たり焼いたりするめんどうがないから、と思いました。そこで、夜になり、みんなが寝しずまってしまうと、おかみさんは、そつと男の子の布をとりあげました。そしてそのかわりに、北風からもらったのによく似てはいますが、**ただのパンひときれだつてだすことのできない、あたりまえの布**を入れておきました。

『太陽の東 月の西』アスビオルンセン／岩波少年文庫

ごちそうが出るとなつたらなんでも出る、出ないとなつたらパン一切れも出ない。極端ですね。完全性の表れともいえます。極端な対比だから、イメージが鮮明なのです。

「海の水はなぜからい？」

むかし、むかし、ふたりのきょうだいがありました。**にいさんは、金持ちでしたが、弟のほうは、貧乏でした。**クリスマスの晩がやってきましたが、**貧乏な弟の家は、ひとときの肉も、ひとかけらのパンもありませんでした。**そこで、貧乏な弟は、金持ちのにいさんのところに行って、ごしようだから、クリスマスを祝うために、少しばかり、たべものをわけてくれまいかといつて、たのみました。

『太陽の東 月の西』アスビオルンセン／岩波少年文庫

ヨーロッパの昔話に出てくる二人兄弟は、対照的な性格か、または容姿も性格も全く同じかどうかですね。ここは、**正反対。**弟の**貧乏の程度**が極端です。

「金のがちょう」

むかし、あるところにひとりの男がいました。この男には、三人の息子がいました。上のふたりはかしこい子だといわれていました。いちばん下の子は、ぬけさくとよばれていました。そして、笑いにされて、何かあるたびに、のけ者にされていました。

あるとき、一番上の息子が木を切りに、森へ行くことになりました。母さんは、息子がおなかをすかせたり、のどがかわいたりしないようにと、おいしい、上等な、たまご入りのケーキと、ワインを一瓶持たせてやりました。

森の中へ入っていくと、上の息子は灰色の服を着た年とつたこびとに出会いました。こびとは、上の息子にあいさつして、「どうか、ケーキをひとつわけてください。そして、ワインをひと口飲ませてください。わしは腹ぺこで、のどがからなんだ」といいました。

ところが、かしこい上の息子は、

「おまえに、ケーキとワインをやってしまったら、ぼくのぶんがなくなってしまうよ。さつさと消えうせろ」といって、歩いていきました。

そして、木を切りはじめましたが、すぐに手をすべらせて、斧で自分のかたほうの腕を傷つけてしまいました。それですぐにうちへ帰って、包帯をまかななければなりませんでした。

まもなく、二番めの息子が森へ行きました。母さんは、上の息子と同じように、たまご入りのケーキと、ワインを一瓶持たせてやりました。二番目の息子も、灰色の服を着た年とつたこびとに出会いました。そして、ケーキをひとつと、ワインをひと口飲ませてくれとたのまれました。けれども二番目の息子もつめたく、

「おまえにやれば、それだけぼくのぶんがへるんだ。さつさと行っとくれ」といって、歩いていきました。

そして、木を切りはじめましたが、すぐに斧で自分の足を傷つけてしまい、人にかつがれて、うちへ帰らなければなりませんでした。

こんどは、ぬけさくが、

「父ちゃん。ぼくが行って木を切ってくるよ」といいました。すると、父さんは、

「兄きたちが、ふたりともひどいめにあったんだ。おまえはやめとけ。おまえなんかにできるもんじゃない」といいました。

けれども、ぬけさくが、どうしても行かせてくれとたのむので、父さんは、とうとう、

「それならまあ行ってみろ。怪我をしてはじめてりこうになるもんだから」といいました。

母さんがくれたのは、水でこねて灰の中で焼いたお菓子と、すっぱいビールだけでした。

ぬけさくが森の中へ入っていくと、灰色の服を着た年とつたこびとに出会いました。こびとは、ぬけさくにあいさつして、

「あんたのお菓子をひとつと、あんたのビールをひと口飲ませてくれないか。わしは腹ぺこで、のどがからなんだ」といいました。すると、ぬけさくは、

「ぼくは、灰の中で焼いたお菓子と、すっぱいビールしか持っていないんだよ。それでもよければ、いっしょにすわって食べよう」と、答えました。

『語るためのグリム童話』小澤俊夫監訳／小峰書店

長い引用になりました。よく見てください。上の二人と末っ子が、すべてにおいて対照的です。